HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	農村青年教育研究の課題
Author(s)	大坂, 祐二
Citation	社会教育研究, 9, 1-21
Issue Date	1989-01
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/28466
Type	departmental bulletin paper
File Information	9_P1-21.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

農村青年教育研究の課題

大　坂　祐　二

1．は　じ　め　に

農村青年は，戦前・戦後を通じて社会教育の主要な対象であった。しかし，農業，農村の変化に伴い青年教育の主要な舞台は農村から都市へ移ってゆく。日本社会教育学会が「学会三十年の理論的蓄積と到達点を明らかにし，さらに今後の研究課題を積極的に提示することを意図し」[1]て編集した『現代社会教育の創造』の「農村青年教育研究」の項においても，1970年代以降「農村青年教育研究も殆どなされなくなってきた」とされている[2]。

一方，都市勤労青年の学習論では，那須野隆一によって提起された「生活史学習」がひとつの到達点になっている。60年代に名古屋サークル連絡協議会の実践から生み出されたこの学習論の「実践的・理論的広がりと深まりは，名古屋という地域的限界を越えて，」「日本の青年集団の諸活動に少なからぬ影響を与えている」[3]。青年が見えない，集まらないと言われて久しいが，すぐれた実践から学ぶべきことは多いだろう。

先の「農村青年教育研究」の項で上野景三は，「農村・都市の青年に共通する青年の人格発達という課題を中軸とした青年集団論，学習内容・方法論」として那須野の提起に注目している。しかし，「青年の人格発達」を都市と農村でどこまで同様に考えられるだろうか。青年教育全体においても「総体としての人格の発達が意識されるようになっている」[4]とされているが，「農村青年教育研究も殆どなされなく」都市部の実践を対象にした研究や，都市・農村のちがいを必ずしも問わないものが多くみられる。「人格発達という課題」そのものは共通であっても，その発達のあり方を都市・農村で押しなべて共通のものとするかどうかは「人格」のとらえ方，「青年問題」のとらえ方にかかわるだろう。

たとえば碓井正久は，「青年問題」なるものの一般的図式的な理解を次のように示している。やや長くなるが引用して紹介しておこう[5]。

「いうまでもなく，こんにち〈青年〉とよばれる社会的存在は，近代資本主義社会の成立展開の過程，別して帝国主義的爛熟の過程において生みおとされたものである。きわめて一般的図式的に言えば，この過程で，初等義務教育制度の整備に端的にあらわれるように，幼弱児童労働保護制限制度の整備によって，低賃金労働力調達の対象が年令的に上におしあげられるとともに，経済的独占の進行にともなう社会的役割の独占も進行し，そのなかで，役割の平等と行動の自由・独立・責任との保持を保障される年令もまた，ますます上におしあげられ，そこにいわゆるmarginalな存在として青年層を形成させ，資本主義の爛熟にともなう社会的諸矛盾の激化するなかで，もっとも歪んだかたちで

は非行犯罪の増加として現象するような，青年の思想・行動の動揺不安定を基調にする広範な〈青年問題〉を発生させてきたということができる。そして，その青年問題に対応する社会的関心の集約として，こんにちいわれる意味での青年教育が登場してきたわけである。」

資本主義の爛熟にともなう社会的諸矛盾が，都市・農村の地域格差を伴いながら進行するのであれば，そこに現れる青年問題もまた都市・農村によって異なってくると思われるのである。

また青年教育が「青年問題に対応する社会的関心の集約」であるならば，青年教育の重点もその時々によって異なってくるのも当然であろう。

そこで本稿では，これまでの青年教育研究のなかで「青年問題」がどのように取り上げられてきたか検討することで，農村青年教育研究にとっての若干の論点整理を行うことにしたい。特にここでは，勤労青年の教育・学習の実践と深くかかわってきた主要な学習論を対象にする。さらに，僅かではあるが事例の検討も加えたうえで，今後の研究の大まかな方向をも展望したい。

2．共同学習運動における青年問題

1950年代に農村の青年たちを中心に広範に展開された学習活動として，小集団学習，あるいは共同学習運動があることはよく知られている通りである。この学習活動の中で青年たちが盛んに取り上げた問題，千野陽一の表現を借りれば，青年たちが生き生きと眼を輝かして，話し，書き，耳をかたむけた問題の多くは，農村に残存する“封建性をめぐる諸問題”であった[6]。以下，同氏の論文「青年学習集団のひろまりとふかまり」から，共同学習における青年たちにとっての問題を見てゆこう。

共同学習は，青年学級振興法制定をめぐる議論をきっかけに，この法制化に対置される形で生み出されたものであるが，この学習運動のひろまりを支えたものは，個々の農村青年にとっての，より具体的な現実の問題であったろう。それは農地改革後もなお農村に残る封建性にたいする，戦後民主主義教育を受けた青年たちの反発であり，“はだかの話し合い”や仲間づくりを求める潜在的な欲求である。また当時の青年団の活動は，そうした欲求とはうらはらに，市町村行政や村落共同体の下請け作業の性格が濃い社会活動が多く行なわれ，その結果として停滞してゆく団活動をなんとか活発化させようとする青年団幹部の思惑もあった。

「身近かで切実な問題」の話し合いや生活記録といった方法をとる共同学習によって，「現実にはすくなくとも次の三つの過程が進行した」とされる。第一に仲間づくり，すなわち青年たちが「なんでも気楽に話せる親近感にあふれた集団の一員になっている自己を発見し，その主体性と人間性を，ある程度までは，回復しえた」こと。第二に仲間どうしで不平・不満を話し，書きあうなかで，個々の問題が共通のものとして把握され，客観化される，そうした思考方法が成長していったこと。第三に，「学習をとおして，青年団内部の民主化とでもいうべき過程が進行」したことである。

共同学習運動は，しかし，50年代後半には停滞の時期をむかえる。活動家からは「話し合いのマンネ

リ化」「書くことがなくなる」といった声があげられ，共同学習の提唱者を含む研究者の間では，停滞の原因をさぐり，それをのりこえようとする論考がなされた。また，後年になっても分析が試みられ，様々な整理がされている。ここではそれらを一つひとつ検討することはできないが，主に指摘されていたことは次のようにまとめることができるだろう[7]。

ひとつには，「仲間づくり」や「身近な問題の学習」がそれ自体として，あるいはこれらによって「青年団活動の活発化」をはかることが目的であるかのような誤解があったこと。山形などではじまった小集団学習には「まずなによりも，地域の青年ひとりひとりの生活と地位の向上への強いねがいが，その底に脈々と流れていた」はずである。

したがって，二つめに，なお農村に残る封建性を打ち破り，「地域の青年ひとりひとりの生活と地位の向上」をめざすならば，そうした明確な目的・方向を持った実践・運動との結び付きを考えねばならない。それはまた，共同学習の限界を自覚することでもある。この点に関して碓井は，「無自覚の問題を自覚させることこそ，〈共同学習〉といわれるものの本義である」とし，「地域の枠をはなれた，大衆的・組織的な青年運動・農民運動・婦人運動・労働運動」こそが体制矛盾克服の任務をになうと指摘した。またこれを受けて千野は，小集団学習は「青年の正当な要求をあきらかにし，その要求をはばむ条件をつかみとる，有効な学習活動の一つの方式にすぎない。」青年が低い地位から脱し豊かな生活を実現しようとするなら「ときには青年団の枠をもこえて，明確な目的と組織をもった運動団体のなかで，実践活動を展開することが必要になってくる」とした。

農村の封建遺制が現存の社会体制と複雑に関わるものであれば，社会体制全体への客観的な見通しなしには，問題の解決には至らない。身近な問題から矛盾をひろいあげ社会体制全体まで見通して追求してゆくには，ある程度の基礎的・体系的な知識が必要となる。しかし「多くの青年にはそうした知識に欠けている場合が一般的で」あったし，共同学習は「身近な問題」ということを強調するあまり，社会科学の系統学習を軽視あるいは排除するものとなってしまった。これが三つめの問題である。千野はこれに対して「身辺問題＝自我の軸と政治・経済の仕組＝社会の軸」の統一を提起した。

そこで四つめには，話し合いの中から問題をほりおこし系統学習へと導いてゆく，リーダー・チューター・講師の役割が明確にされる必要があった。これに加えて千野は，「民主的な態度を身につけているのみではなく，一般青年とは異質なものの考え方，理論的なものの考え方をもったすぐれたリーダー」をつくりだすためには，集団学習のなかで軽視されがちであった個人学習が重視されねばならないとしていた。

こうしたいわば学習内容編成論，組織論上の限界だけでなく「共同学習論の停滞には，しかしもう一つの理由があった。それは，既存の方法では，学習主体がとらえられなくなってきた，という問題である」として藤岡貞彦は，学習主体である青年の変化と，青年問題の転換を指摘する[8]。

1950年代後半，農業の商品的展開と農民の賃労働者化を前提とする農業近代化は，一方における大量の青年の賃労働者化と，他方における少数の農業青年の専業化という対照を生んだ。「もはや，むらの

青年たちを一色でぬりつぶすことはできず，社会経済上の変動にもとづいて興味，関心，生活が分解しはじめていた」。この分解を藤岡は，①「労働市場へ投げ出され，あるいは営農の見通しがもてず，社会変動の波間にただよう像」，②「零細経営打破・農業近代化の意欲に支えられた商品生産農民像」，③「小集団から党派的青年諸同盟に飛翔していった政治的青年像」の〈三つの型〉に整理している。「共同学習の論理は，この三通りの青年像のいずれをも学習主体として明確にえがいてはいなかった」。60年代に入って〈三つの型〉の青年たちがそれぞれつきあたる「運動の政党系列による再編成，地域の変貌，都市化工業化の進行は，共同学習の論理の射程のそとにあった」。「1960年代の初頭，共同学習論がかつて課題としたいえ・むら・仲間の問題は，いまや青年にとって日本経済（構造政策）と政治（安保体制）の問題に置換されねばならなくなっていた」。したがって，学習論の発展にとっては「青年にとって何がいま青年問題であるか」の追究が不可欠であり，「労働青年にとっての学習の中心は労働問題であり，農業青年にとっての学習の中心は農業問題であり，それらの総合としての青年問題の普遍性こそが学習内容編成の基本的視点となる秋がきていた」。

引用が長くなったが，青年にとっての青年問題が何であるかを追究する必要を強調した点で，重要な指摘であったと言える。ところで，氏は同じ論文の中で「圧倒的な青年の賃労働者化こそ，青年問題の根本基軸をなす。そこに青年問題の普遍性成立の根拠がある」[9]としている。そうであれば農村青年教育にとっては，「農業青年にとっての農業問題」と「青年の賃労働者化」とがどのようにかかわるかという課題があったろう。在村通勤青年の増加や青年労働の変化についての指摘は，小林文人など[10]にみられるが，しかし農業問題と青年の賃労働者化とのかかわりは，この時点では必ずしも明らかでない。

3．農民大学運動における青年の問題

「農業青年にとっての農業問題」を中心にした学習活動の展開は，1960年に発足した信濃生産大学に始まる農民大学運動にみられる。

宮原誠一によって構想された農民大学は，1950年代末の長野県や関東の一部の農村のなかで「企業的農業への前進をめざして経営共同化にふみきる中小農ＯＢ青年のうごき」[11]から生まれた。先述のように農業近代化は，商品的展開と農民の賃労働者化を前提とし，多くの中下層農の兼業化・脱農化が進行する一方，農業生産の商品化は広範な農家をつつみこみ，ふかまってゆく。しかし中小農民にとっては，個別経営を前提とするかぎり，規模拡大・資本投資・労働力の合理的使用によって生産性を向上させ，収益を増大させることには困難をともなう。共同化はそうした中で模索されたひとつの道であった[12]。

千野は1950年代末の青年をふまえ，「なお残存する封建性」に対して「青年の地位と生活の向上を目標にした農村青年の学習運動」を展望し，その中核を「中農層以上の階層の青年たち」としていた。しかし後には，「中農層以下の農村青年」が「共同化の方向で展開される生産活動」と「その生産活動の阻害条件と感じられる政治問題」にとりくむ動きに注目することになる[13]。「それは，主として，農業

構造の急速な変化のなかで兼業的零落か専業維持かの岐路に立たされた中農層以下の農村青年，しかも農業経営の実権をにぎりはじめた20代後半の青年をその中心的な担い手として，生活権の防衛という性格を色こくもちながらおこなわれる農業近代化，とくに生産共同化へのうごきのなかから胎動してくる」[14]。農業青年にとっての農業問題は，農業構造の変化を背景に，20代前半に青年団運動や社会科学学習をやってきた青年たちが自らの経営にかかわるなかで明確にされていったのである。

宮原がえがいた「学習運動の目的は，一貫して，働く農民の立場から企業的な農業経営と自立的な農民生産集団をつくりだすために必要な能力をやしなうことであり，学習の性格は，一貫して，実践にそくした生産学習と政治学習との結合である」[15]。地域におけるサークル学習のなかで，自己の経営でおこった「事実を細大もらさず一つ一つ仲間とともに検討」しあい，また「生起した事実に関係するさまざまな資料が手びろくあつめられ」経験的事実につきあわせながらその真のねらいがつかまれてゆく。さらに郡市単位のセミナーのなかで，また，講義，現地報告，討議といった方法を組み合わせ二泊三日にわたっておこなわれる県段階の生産大学のなかで，「より具体的・現実的でしかも科学的な認識がそだてられ，それが実践的エネルギーに転化されていく」[16]。『信濃生産大学解散声明書』にも示されたこのような学習方法の定着は，農村青年のみならず成人の学習にとって大きな教訓となっている。またここでは，このような方法の定着を必然的なものにした学習内容の深化を見逃すわけにはいかない。

中小農にとっての困難な経営を集団的に乗り越える道として選択された共同化は，農基法体制が確立し貿易自由化が進行するとともに，厳しい壁にぶつからざるを得なくなる。信濃生産大学の第1期（1960年～1962年3月）と1961年から62年の佐久乳価闘争は，農業近代化政策の一切が農民にとっての農業近代化を阻んでいることを明らかにした。かくて生産大学の統一テーマは，第1期の「農業共同化問題」から第2期の「構造改善事業にどう対処するか」へと進んでいった。むらむらに現れてくる構造改善事業の事業計画書を読みぬき，事実と調査に照らし合わせる学習方法は，こうした中で定着していったのである。

構造改善事業は個々の経営を圧迫するだけでなく，農民の声も反映されないままに土地・水・労働力を奪ってゆく。生産大学の宮原総主事は，こうした「皆の共通な農業問題を農民だけで考えるのではもう間尺にあわないところへ来ている。おばさんたち・若妻と学習のつながりをつくっていくことにならねばならず，幅をもった展開がなされねばならない」と，第8回の大学を締め括った。第3期の生産大学は「農村における学習運動をいかにすすめるか」をテーマに「地域開発」や「在村通勤労働者」などの問題もとりあげ，地域課題を学習する労農大学を目指した[17]。

信濃生産大学の実践は東北地方を中心に各地に直接・間接の影響を与え，多くの農民大学・労農大学が発足する。それではこれらの学習運動に，どのような労働青年がどのようにかかわっていたのであろう。千野が農業青年と労働青年の連帯が回復するきっかけとしてとらえていたのは次のような点である。すなわち，農協合併によって真っ先に一票を奪われる「零細農家から通勤し長期出稼ぎにでるむらの労働青年」の土地を守りたいという要求であり，職場の低賃金・合理化の嵐のなかで強まってくる「仲間

どうししんみり語りたいという素朴な要求から労働条件の改善・賃金の上昇という要求にいたるまで」のおびただしい要求である[18]。確かに，こうした諸要求は労農青年の学習運動を進めるうえでのエネルギーとなる。しかし，それだけが学習運動を推し進めるものではない。藤岡は「青年運動が中心になって公的社会教育体制を動かして組織していく方向と，農民と教師の提携に基づく組織形態の二つの農民大学運動の流れ」があり，昭和40年代にはいって両者が，上からの農業後継者対策に対抗する「一つの潮流に成長した」ことを指摘している[19]。〈上から〉〈下から〉という対抗関係はともかく，教師や農協労働者，社会教育職員などが運動を進めるうえで重要な推進主体であり，また重要な学習主体でもあることが，ここでは注目される。ひとくちに農業青年と労働青年の連帯と言っても，零細農家の出稼ぎ青年と教師では学習課題も異なってくるであろう。また農民大学・労農大学への参加は，青年にとどまるものではなくなっていた。こうした様々な主体の性格をふまえた学習論の展開が，ここでの課題となるであろう。

しかし多くの農民大学・労農大学が発足するのに比べ，学習主体の性格の変化をふまえた学習論は，農民教育論としても農村青年教育論としても70年代以降十分展開されず，学習運動論，学習方法論に比重が移っていったことが指摘されている[20]。

4．生活史学習における青年の問題

農村を離れ，都市で働く青年が増加してゆくなかで，都市青年のグループ・サークルにおける教育・学習の問題が展開されるようになる。すでに1960年代の後半から名古屋サークル連絡協議会（名サ連）にかかわってきた那須野隆一は，ここでの青年たちの実践をもとに，後に「生い立ち学習」あるいは「生活史学習」とよばれる学習論を次のように提起した。

「都市のサークル活動―なかんずく中小零細企業勤労青年を主体とする都市のサークル活動―の運営精神の基本は，成員各人の生活史（生い立ち）の発表＝劣等感の告白→家族の生活史（生い立ち）の検討＝社会問題の把握→社会の歴史の学習＝社会観の確立→人生論（生き方）の討議＝人生観の修得，というサイクルのなかで，勤労青年の劣等感や孤独感を社会的に―つまり仲間や集団のなかで―克服していく筋道をさし示すことであり，そうした運営技術の重要性も問われるのである。」[21]

那須野によれば，60年代後半の都市勤労青年，「なかんずく中小零細企業勤労青年」にみられる青年問題は，農民層分解の典型としてのそれであり，三重の意味で社会的重圧のもとにおかれていたとされる。すなわち彼らには，第一に，家族ともども「高成長」政策の犠牲となった農業と農村の崩壊の歴史があり，第二に，学校教育時代に「受験地獄」にすら落ちようもなく打ち捨てられた選別の系譜がある。そして第三には，彼らの多くは，就職後の人生設計においても，「高成長」型の処生過程にははじめからなじまない日陰の存在であった[22]。

「生い立ち学習」は，こうした青年たちが自らの生活実態を生活の記録に客観化し，それを素材にし

て学習を組織するという点で共同学習との共通性が，また，家族の生活史の検討を介して社会の歴史の学習をおこなうという点で，共同学習の弱点の克服が意識されている。生活史学習の内容と方法を「労働者教育の一視点」[23]から検討した氏によれば，それまでの労働者教育は，サークル形式による人生論中心の探求と講座形式による社会科学中心の学習とに分化されがちで，それらはいずれも一面的な生活認識しかもたらさないとされる。それに対して生活史学習は，集団の成員各人とその家族の生活史[24]のなかでつきあたる諸問題を社会問題として認識し，その共通認識のうえでの社会の歴史の学習を通じて，自分や家族が体験した「現代的貧困の諸現象」を歴史の流れのなかで理解し，受動的・宿命的な諦観からぬけだして「労働者としての生活認識」とそれにもとづく生活変革の志向にいたる筋道として示される。

また那須野の学習論の特徴として，こうした学習活動を支え，活動家を中心に学習活動を日常化させるものとして，「問わず語りの本音の話しあい」を組織する「たまり場学習」を重視している点があげられる[25]。

これらの学習論は70年代半ばには，農村の青年団をふくめた少なからぬ青年集団に生活史学習・たまり場学習が一定のひろまりをみせていることをふまえて，「低成長」時代の〈使い捨て生活意識〉を克服するための学習論・青年集団論として提起される[26]。ここでいう〈使い捨て生活意識〉とは，「高成長」時代の〈大量物質生産〉方式＝〈大量物質破壊と大量物質消費〉方式と「マン・パワー・ポリシー」にみられるような労働力政策が国民の生活様式のなかに浸透・定着し，〈人間連帯の喪失〉とも呼ぶべき様々な現象となって現れている意識を指している。それは青年の世代を焦点にして次の四つがおさえられる。ひとつは老人世帯の増加にみられる〈親＝上の世代の使い捨て〉，二つには子捨て・子殺しにみられる〈子＝下の世代の使い捨て〉，三つめに受験競争・就職競争・昇進競争での排他的競争心にみられる〈友＝同じ世代の使い捨て〉，そして四つめに青年の刹那的射幸心にみられる〈自分の使い捨て〉である。「低成長」の時代にはいって，青年層のあいだにこの〈使い捨て生活意識〉の問いなおしがはじまり，青年運動の新たな潮流が生み出されつつあることを，那須野はたまり場学習や生活史学習のひろまりに見ているのである。

那須野の提起は日本青年団協議会（日青協）から発行された氏の著書『青年団論』などによって，地域青年団運動に少なからぬ影響を与えた。また，「たまり場」の必要は，那須野氏の提起以降も多くの実践家・現場の職員・研究者によって強調されている。しかし，日青協が1979年に方針化した「たまり場学習」は永く定着せず，やがて方針から消えていったという。更に，70年代後半からの地域青年団運動の高まりをとらえて「第二の高揚期をむかえつつある」との評価がされたものの，それも80年代に入って打ち消されている[27]。これに先立って笹川孝一は，70年代後半の青年団運動の高揚について，政府・独占による「ふるさと運動」「ボランティア運動」の展開がひとつの要因になっており，この高揚が必ずしも楽観できるものでないことを指摘していた[28]。

那須野は青年の〈使い捨て生活意識〉克服の兆候のひとつとして，「多様な形態での主体的な〈ふる

さと運動〉」の展開をあげていた。では生活史学習・たまり場学習は，政府・独占による「ふるさと運動」の展開といった動きにどれだけ対抗し得たのだろう。

前節で見た農民大学運動においては，「生産活動の阻害条件と感じられる政治問題」，農民の望む農業近代化を阻む農業近代化政策の真のねらいを見抜くことがいわば“社会の軸”であった。また，理論と実践の循環を重視していたことも『信濃大学解散声明書』などに示されていた通りである。一方，生活史学習は自分や家族が体験した「現代的貧困の諸現象」を歴史の流れのなかで理解し，受動的・宿命的な諦観からぬけだして〈使い捨て生活意識〉を克服することに重点がおかれている。また，青年の「生活集団が学習と実践（これは，生活集団が生活と人格の“まるごと集団”であることから，きわめて多様でありうるとされる－引用者注）の双方を不可欠の活動形態として内包している」との指摘もされている[29]。

しかし，〈使い捨て生活意識〉を実践的に克服しようとするときに，その実践を阻もうとするものを明らかにしてゆくかまえは，生活史学習では明確になっていないのではないだろうか。もちろん，那須野が近年指摘しているように，「個人としての青年は誰しも，そのときどきに直面する生活課題を解決するための学習に自ら立ち向かうであろう，などと考えるのは幻想で」あり，「少なからぬばあいに，社会教育（青年教育）は，青年の〈集団づくり〉と〈学習おこし〉とを初手の段階から，しかも同時並行的にはじめなければならない」[30]ような状況があることは否定できない。であればなおさら，青年たちの必要と要求を具体的にとらえ，集団づくりをおこなうところから，青年の要求を阻むものを明らかにし，それを実践的に乗り越えてゆくまでの筋道を示しうる学習論のふかまりが今後求められる。

「〈使い捨て生活意識〉の克服」とのかかわりで言えば，ひとつにはこうした意識のあらわれを，青年の労働と生活の実態にそくして明らかにしてゆくことが課題となる。那須野の言うような，大量生産＝大量消費方式と労働力政策からの説明では，一般論に過ぎると言わざるを得ない。いまひとつには，青年たちが直面している現実の問題を克服してゆくなかでの，学習過程の分析が求められる。この点は，これまで活動家の自己形成といったテーマで論じられてきたが，“活動家”が一部リーダー層に限られないことはいうまでもない。また，青年の学習・運動の分析には，成人の学習・運動とのつながりも視野にいれなければならないだろう[31]。

以上のことは，青年の問題を，それを規定しているであろう地域における労働や生活の実態とのかかわりで明らかにしてゆく必要があることを示している。生活史学習・たまり場学習が都市中小零細企業の勤労青年のサークルを主体としたものから，ひろく青年集団の学習論として提起された経緯は先程見た通りであった。では，基本的には都市勤労青年の学習論である生活史学習・たまり場学習が，なぜ農村の青年団にも受け入れられていったのか。この時点で，学習主体たる農村青年の性格が検討されねばならなかった。ひとくちに農村青年といっても，現在では多様な階級・階層に分化していることはすでに多くの指摘がされている通りである。したがって，青年をとりまく状況がきびしくなっていると言うとき，そのきびしさを多様な青年の階層のちがいをふまえ，具体的にとらえていかなければならない。

この点でも地域の実態とのかかわりが重視されるのである。

5．地域青年団活動の展開　－訓子府町の事例から－

現実の地域青年団は，前節までに見てきた青年教育・学習論の蓄積や各地の経験に学びながらも，それぞれ独自に活動を展開していることは言うまでもない。そうしたなかで，80年代に入って特に注目されているのは，様々な地域問題へのとりくみや各種のイベントやフェスティバルへのとりくみなど，多様な形態をとりながらも直接に地域へはたらきかける活動である[32]。もちろん例えば合成洗剤追放運動と，盆おどりやお祭りへのとりくみを一緒くたにすることは慎まなければならないだろう。特に最近のブームとしての「地域づくり」には「イベント主義に陥ったり，青年団のみの経験主義に走り，青年団員一人ひとりの生活実態を無視した形で組織強化・拡大を進めていくことへの警鐘がならされ」ている[33]。が，地域の身近かな問題が学習・実践の素材を与えていることも見逃せない点である。

特に農村地域の場合，地方切り捨て，農業切り捨てと言われる事態が進行しつつあるのに抗して，生産を基盤に据えた地域づくりを推し進めようとするとき，青年教育，あるいは地域青年集団の活動がどのような役割を果たし，そこで青年たちがどのように成長してゆくのかは，重要な論点であろう。この点を抜きにして，青年たちが自らの将来を見通し，いきいきと働き生きるための教育・学習をつくることは出来ない。農村青年教育が，都市勤労青年の教育に学びながらも独自に深めていかなければならない点がここにあるだろう。

そこで，以下では，北海道網走支庁管内訓子府（くんねっぷ）町の事例をもとに，地域青年団の活動の意義や問題点を，地域産業（ここでは農業）の問題とのかかわりで検討したい。

訓子府町青年団体連絡協議会（以下，訓青協と略す）は現在７単位会，18歳（規約では15歳）から25歳前後の青年約90名を組織し，道内でも活発な活動を行っている青年団のひとつとして知られている。特に70年代末以降，冬まつりの主催や町のふるさとまつりでの“いかだ下り”の主管といった行事へのとりくみや，ユニークな機関紙の発行などの活動が目立っている（表１，２）。この訓青協でも，1980年度の活動総括のなかに「であい・ふれあい・わかちあい」といった用語が見られたり，84年に那須野氏を招いて行なわれた研修会では「去る者は追え」か「去る者は追わず」かが話題になったりと，那須野「青年団論」と全く離れたところで活動が展開してきた訳ではない。とはいえ，「生活史学習」や「たまり場学習」，あるいはその他の継続的な学習活動が，活動全体のなかに意識的に位置付けられている訳でもない[34]。従って，現在のいわばイベント的・行事中心的な活動の意義や問題点から，いかに教育・学習面での発展を展望するかが問われる。

(1)　訓子府町の農業

それではまず，訓子府町の農業について概観しておきたい。訓子府町の農業は主に畑作を中心にして

いるが，1960年代後半，構造改善事業等による農業機械の導入とともに経営規模の拡大，経営形態の変更がすすみ，大きくその姿を変えてゆく。同町の農業は様々な形態がモザイク的に分布していることにその特徴があるとされているが，そのうち小麦・ばれいしょ・てんさいの三輪作，あるいはこれに豆類を加えた四輪作が基本的な形態のひとつになっている。それが比較的よく出ている地区に北栄地区があり，以下はこの北栄地区での調査をもとに述べてゆく。

北栄での輪作を表3で見ると，ばれいしょの比重が10～15haの層を中心として全体に高く輪作のバランスがとれていないために，経営の不安定や地力維持が困難になっていることがうかがわれる。この地区のばれいしょは反収などの面からいっても決して他より有利だという訳ではないが，豆類は価格の変化が激しいことや，てんさいには作付の制限があることなどが，その背景になっていると思われる。

こうした経営の不安定さに対する対応は，規模別の層ごとにちがってあらわれている。5～10ha層は主に価格の安定しているたね小麦・たねいもや，野菜などの補完作物を導入し，10～15ha層は補完作物と農外就労によって，15ha以上の層は小麦を拡大したり酪農専業化することで経営の安定をはかろうとしている。

しかし，1975年あたりから機械は共同所有よりも個人所有が多くなり，先行投資は多くの負債をかかえさせ，また，肥料などの資材の高騰，生産物の価格の低迷などによって所得率は下がる一方になっている。これに対しても，機械利用の共同化を新たに行うなどの対応がされているが，多くは作目別の機能的なものであり，また生産者組織も同じ作目のもの同士のつながりで，作付の合理化や地力維持の試み，新しい作目の導入などに限界を与えている。各農家の経営見通しも，こうしたなかで積極的なものとそうでないものに別れているように見える（表4）。下層に後継者がない農家がいくつかあることも考えると，今後また離農と規模拡大が繰り返される可能性も考えられる。これに対して，地域ぐるみで作付の合理化や地力維持をはかるような農業のありかたが対置されるであろう。

個別の農家ではなく，地域ぐるみで生産を引き上げてゆくような農業を目指すとすれば，そうした農業を担う後継者をいかにそだてるかが問題のひとつとなる。農家の親たちがこれを果たそうとする場合，地域組織のあり方が地域全体の発展を考えてゆけるような態勢になっているかどうかが問題になると思われるが，地域組織＝実践会にかんしては生産者組織別に別れてしまっているのが現状であろう。

(2)　農業青年の学習機会

それでは農業青年の教育・学習の場で，地域農業を見直し，地域づくりの担い手となる青年たちを育ててゆけるだろうか。以下，青年の教育・学習の場として，青年団，4Hクラブ，青年学級，農協青年部などについて見てゆく。

訓子府の青年団では，戦後はやくから農業改良普及所の協力なども得て，肥料増産共励会など生産学習が行なわれていた。また1954年からは青年学級が単位会ごとに開かれ，ここでも農業にかんする学習が行なわれていた。4Hクラブは，青年団とは別個に独自の活動がなされていたが，1962年に会員の減

少などから両者が合併，訓青協のグループ活動のひとつとして4Hクラブの活動が行なわれた。

こうした活動は，青年の減少や普及所の統合によって次第に消滅してゆくことになる。また青年学級では，各単位会で行うもののほかに全町の青年を対象とした冬期農業講座が設けられ，農業の学習はここを中心にするようになる。この講座は71年には周辺町村と合同で行う広域事業となり，さらに75年には網走支庁で開設している農業学園との兼合いから，国内研修の事前（あるいは事後）研修との位置付けで，技術学習に止どまらない，より「広い視野から」の学習が目指された。しかし，参加者も限られており，研修の報告などのとりくみなどもほとんどなされておらず，かつての青年学級のような身近な学習機会とはなっていない。

訓子府町農協青年部では農業問題研究会（1987年度で青年部195名のうち12名が参加）がおかれ，「初歩的な勉強」を視察研修旅行を含めた年6回ほどの集まりをもって行っている。特に86年度は，青年部の学習会や『青年部だより』と併せて資材価格の見直し・肥料の自家配合の問題を取り上げ，研究会以外の青年部員からの関心を集めた。これらのとりくみは，16,7歳から35歳までいる青年部員のうち主に年長者が中心になっている点が問題ではある。しかし，25歳ごろまでの青年団を含めた仲間づくりが，学習活動のひとつの基盤になっていることは見逃せないであろう。

広く地域農業のあり方を考えてゆけるような農業青年の教育・学習が求められるのに対して，彼らの教育機会はほとんど後退していると言ってよいだろう。こうしたなかにあって，青年団のイベント的・行事中心的な活動はどのような意義をもつであろうか。

(3) 青年団活動の展開

訓青協の活動がイベント的・行事中心的と言っても，それは彼らなりの活動の展開の上にある姿である。訓青協の歴史についてここでは詳しくはふれないが，活動の展開のポイントのひとつは，市街地青年の組織化であった。

1946年の訓子府村青年団結成から数年間を除き，訓子府の青年団は永く農業青年の集団であった。部落ごとの単位青年会からなる訓青協は，従って，市街地には単位会を持たなかった。1960年代以降，町全体の青年の減少とともに会員の減少も著しく，1965年に274名であったのが，76年には87名とそれまでの最低となる。特に女子会員の減少は激しく，60年代前半までは男女ほぼ同数であったのが，76年には先の87名のうち女子が17名，78年には103名中14名という状態にまでなった（表5）。

市街地青年組織化への直接のきっかけは，上部団体の青年大会（スポーツの大会）のうち，いくつかの競技（ソフトボールなど）が男女混合で行なわれるためであった。チームづくりのために高校時代の同級生，町役場や農協などに呼び掛けをするなかから，市街地青年組織化の動きは生まれた。また，組織化のなかでの職場の制約や町民の「青年団に娘をいれると農家の嫁にやらなければならない」といった声は，町の人たちにもっと青年団の活動を知ってもらおうという方向をもうんだ。70年代半ばからのこうした動きから，やがて1979年には市街地単位会が結成され，それに先立つ76年に発行された訓青協

創立30周年記念誌では，「住民と密着した活動を中心とし我々青年が町づくりに努力しなければならない」との決意が述べられることになる。

市街地単位会が結成された同じ年度の（1980年）2月，訓青協主催による第1回冬の祭典が開かれた。この祭典は，上記のような決意に「冬に何かを」という意見も加わって計画され，他の青年団体・文化団体への呼びかけによって，商工会青年部，青年学級，20歳（はたち）の集い，よき文化にふれる会，太鼓同好会の協賛を得て実現した。

82年2月の第3回冬の祭典は町の行事としてとりあげられ，81年に発足した町産業観光振興協議会（以下，振興協議会と略す）を中心に，商工会青年部と訓青協とで実行委員会をつくり開くことになった。青年たちにとってこの「昇格」はうれしいことではあるが，自分たちが作ってきた行事でもあり「町にわたす」気はなかった。しかし，行事が大きくなり金銭的な負担も大きかったことや，第2回の祭典で，参加したこどもが雪像から落ちてけがをしており，万一の時の責任をどうするかという問題もあって，結局冬の祭典は「町にわたす」ことになった。

冬の祭典のほかにも，夏の「ふるさとまつり」は訓青協，商工会青年部のほか，農協青年部，農協職組青婦部，役場職員親睦会青年部の「青年5団体」による実行委員会で運営され，これらの団体との連携も深めている。こうしたなかで訓青協は，他の団体とは違う青年団の性格を意識しはじめる。特に商工会青年部との関係では，「損得ではなく，町民との理解・交流を深めるため」に行事にとりくむ立場を作っていった。

また，町レベルの大きな行事をこなすことは，単位会を基礎とした青年団の活動のありかたを改めて問題にした。1980年7月に行なわれた常呂川のいかだ下りは，前年にある単位会が行ったものを訓青協の行事としたものであった。この開催にあたって，日程を町の「ふるさとまつり」にあわせるよう町側から要請があり，7月には恒例の行事であるキャンプが予定されていたがこれをとりやめたという。この年度の年度末総会では，キャンプをとりやめにした理由について質問があり，行事が重なっていたが町全体のおまつりに参加することに意義があることから理事会で承認した旨が説明された。それに対して会員からは，単位会の行事を優先してほしいとの意見が出されている。翌81年度の年度始総会においても，「青年本来の活動を忘れ，そういった行事ばかりに参加するのはおかしい」との意見が出され，振興協議会への加入の話しももちあがっていたが保留にされた。さらに翌年の82年度始総会では，振興協議会は青年団の活動とは基本的に異なる点が多いと考え，これに加入せず「町民の方々との理解・交流を深める意味で，青協活動に対し無理のない様な形で各事業へ参加協力していく」ことが報告されている。

訓青協会員へのアンケート調査によると大半の青年は，他の産業との比較で言えば2次，3次産業よりも，農業を基幹としたまちづくりを考えているが，青年自身の役割は農業そのものよりもイベントなどでまちのムードを盛りあげるところに見出だされている（表6）。上で見たような経過がここに反映されていると言えるだろう。しかし訓青協のイベント的・行事中心的な活動は，その基盤であるはずの

単位会の活動と充分結び付かないまま展開していることが，行事に追われることに批判的な意見に端的に示されている。あるいは，会員ひとりひとりの声を生かす態勢がないまま展開していると言える。

しかしこの問題は，一面では，訓青協の活動をお祭り下請け的なものにせず，たえず活動のあり方を問いなおすものにもなっている。また町民や他の青年団体との交流，事業の運営などを含めたいわば〈社会勉強〉は，自家の経営にかかわるようになった農業青年に，経営の向上や地域の活動（保育所など）に積極的にとりくむかまえを生み出しつつある。先に見た農業の問題とのかかわりで言えば，こうした芽を大事にしながら，今後いかに青年自身の要求と地域の課題を結び付けてゆくかが問われてくる。またそれは青年団のみの問題ではない。先に農協青年部の学習活動についてふれたが，こうした青年たちが関わる様々な組織・団体に即した課題を結びあわせてゆくなかで，地域の担い手となる青年の発達が展望されるのではないだろうか。

6．おわりに

1960年代までの農村青年の学習運動は，身のまわりの問題と政治・経済の問題を結び，問題解決のための実践と切りむすぶ学習の構造をうみだした。しかし，学習主体のひろがりに対しては，それに応じた学習論のふかまりは見られなかった。

一方，生活史学習は青年の階層分化と孤立化のすすむなかで，たまり場でのふれあいや自らの問題を社会的な文脈でとらえるかまえを作りだした。しかし，農村青年の性格をふまえ，彼らをとりまく問題を解決してゆく筋道を示したものとは言い難い。ある意味では，斎藤秀平が言うように，青年が切りむすぶべき切実な課題はそれぞれ青年自身が探求すべき課題として残されている[35]。

それに対して訓青協の活動の展開は，農業青年が市街地の青年（その多くは公務労働者であるが）と活動を共にし，また他組織の青年たちとも交流することで地域の問題に眼をひらく可能性を（可能性ではあるが）うんでいる。このことは農村青年教育の研究に，多様な階層の青年を含む地域青年のそれぞれの性格をふまえた学習論のふかまりを迫っていると言えるだろう。

本稿では農業青年の事例について若干の検討を行った。しかしそれは非常に雑把で類推の域を出ない部分も多く，彼らの労働・生活の実態におりてその性格を明らかにするには至っていない。また農業青年と労働青年が共に活動していることについて，その意義を明らかにするには農業青年だけを論じる訳にはいかない。これらはむしろ今後の課題であるし，そのためにさらに深めなければならない問題もいくつかあるだろう。特に農業青年の性格や彼らがかかえている問題を明らかにするには，農民教育論の蓄積に学ぶことが不可欠になる。農民教育論の立場からも，「これまで独自に論じられてきた青年教育，婦人教育なども，たんに青年教育，婦人教育の『農民版』としてではなく，農民家族，協業の性格などとの関連において社会的関係をふまえてその内容が深められなければならない」との指摘が山田定市からされている[36]。しかしその山田ほか北大教育学部社会教育研究室を中心とした研究でも，青年や農業

後継者そのものに焦点をあてたものは多くなく[37]，今後共に発展させなければならない分野であると考える。

注記

1．日本社会教育学会編『現代社会教育の創造』p.1（東洋館出版社，1988）
2．同上p.264
3．姉崎洋一「都市勤労青年の学習・教育実践とその社会的性格」（日本社会教育学習編『現代社会と青年教育』，東洋館出版社，1985）
4．大串隆吉「青年の変化と青年教育研究のあゆみ」，前掲書所収
5．碓井正久「農村における青年教育」（『教育学研究』29(4)，1962）
6．千野陽一「青年学習集団のひろまりとふかまり」（同『勤労青年教育論』，法政大学出版局，1971，初出は宮原誠一編『青年の学習』，国土社，1960．以下，「ひろまりとふかまり」と略記）
7．千野「ひろまりとふかまり」，吉田昇「共同学習のゆきづまりをどう打開するか」（『吉田昇著作集』第2巻，三省堂，1981），碓井「青年学級と定時制高校」（『講座教育社会学第8巻社会教育の再編制』東洋館出版社，1957），藤岡貞彦「昭和30年代の社会教育学習論」（同『社会教育実践と民衆意識』第1部第2章，草土文化，1977）等を参照
8．藤岡，前掲論文pp.143－150
9．同上p.167　注（34）
10．日本社会教育学会編『農村の変貌と青年の学習』，国土社，1961等を見よ
11．宮原誠一「学習サークルから農民大学まで」（『宮原誠一教育論集』第2巻国土社，1977，初出は『月刊社会教育』1960年12月）
12．千野「政治学習と生産学習の統一」（同『勤労青年教育論集』p.35）
13．前者は「ひろまりとふかまり」，後者は「政治学習と生産学習の統一」
14．千野「政治学習と生産学習の統一」p.28
15．宮原前掲論文
16．千野「農村青年の生活要求と学習運動」（同『勤労青年教育論集』第3章，p.56）
17．藤岡「社会教育学習論の転換」（同『社会教育実践と民衆意識』第2部第1章），千野『農村青年の学習運動』（全国農業改良普及協会，1980，特に第2章）等を参照
18．千野前掲，「農村青年の生活要求と学習運動」
19．藤岡「農村社会と教育」（『教育学全集14教育と社会』，小学館，1968）
20．鈴木敏正「農民教育・学習の基礎構造」（美土路達雄監修『現代農民教育論』，あゆみ出版，1987）
21．那須野隆一『青年団論』（日本青年団協議会，1976）より引用。那須野「都市青年とサークル活動」（日本青年団協議会『地域青年運動の展望』，1968）

22. 同「生活史学習と自己形成」(『教育』1979年9月)
23. 同「労働社教育の一視点」(倉内史郎編『労働社教育の展望』, 東洋館出版社, 1970)
24. なお,「社会問題の把握」に必要な教育・学習素材は「家族の生活史」に限られず, 一般的には労働者の生活史と現在の生活が密接な関係をもっている生活環境であるとされている。(那須野前掲論文p.25)
25. 那須野「青年集団の学習活動」(『月刊社会教育』1976年2月) および前掲『青年団論』
26. 同「現代社会と青年」(『教育』1977年9月) なお,『青年団論』(初版) では「『使い捨て』生活様式」となっている。
27. 掛谷昇治「地域に生き地域を支えつづける青年団活動」(『月刊社会教育』1985年7月)
28. 笹川孝一「青年の学習活動の基点をどこに求めるか」(『月刊社会教育』1980年6月)
29. 那須野『青年団論』p.132
30. 同「社会教育における青年問題」(『日本社会教育学会紀要』21, 1985)
31. 笹川は「青年団活動と青年の自己形成」(『月刊社会教育』1981年9月) で, このような分析に取り組んでいる。
32. たとえば千野「地域をつくる青年の学習と運動」(『月刊社会教育』1981年9月) を参照
33. 社会教育推進全国協議会『日本の社会教育実践1988』p.127
34. 学習活動がまったくない訳ではないが, そのほとんどはその場限りのものになってしまっているように思われる。
35. 斎藤秀平「青年論」(小川・柿沼編『戦後日本の教育理論 (上)』, ミネルヴァ書房, 1985)
36. 山田定市「農民の生活の変容と社会教育の課題」(伊東三次編『生活構造の変容と社会教育』, 東洋館出版社, 1984)
37. 青年に焦点をあわせたものでは, たとえば朝岡幸彦「地域農業の発展と農村青年の学習活動」(前掲『現代社会と青年教育』所収) などがある。しかし, 1987年刊の『現代農民教育論』(前掲) では, 主に後期中等教育段階の学校などの機関による農業後継者教育があつかわれているほかは, 特に節を設けて農業青年についてふれてはいない。

付記

本稿は, 筆者の卒業論文「現段階における地域青年団活動の意義」および日本社会教育学会第35回研究大会での自由研究発表「青年層の変化と地域青年団活動の展開」をもとに, 先行研究の検討を加えてまとめた。稚拙な論文をまとめる機会をくださった研究室の諸氏に感謝したい。

表１　訓青協会員の年齢別，職業別構成

年齢	男	女	計
18	5	6	11
19	6	7	13
20	7	7	14
21	6	10	16
22	13	1	14
23	11	1	12
24	11	－	11
25	3	－	3
26	1	－	1
不明	1	－	1
計	64	32	96

職　業	男	女	計　(%)
農　業	40	3	43　(44.8)
酪　農	6	1	7　(7.3)
農業実習生	1	3	4　(4.2)
農　協	1	6	7　(7.3)
製造業	1	7	8　(8.3)
公務員	9	2	11　(11.5)
（うち教員）	(2)	(保母１)	
その他	5	9	14　(14.6)
	信用金庫	信用金庫	
	家畜商など	飲食店など	
家事手伝い	－	1	1
不　明	1	－	1
計	64	32	96

(昭和62年度訓青協会員名簿より作成)

表2　昭和61年度訓青協の活動

月	訓青協(理事会の回数)	町行事への参加	上部団体
4月	訓青協を考える会 年度始総会 新入会員研修会		
5月	単位会訪問　（2）		
6月	訓青協夏期体育大会　（2）		北青協代表者宿泊研修
7月	茨城県関城町青年来町	ふるさと祭 ・いかだ下り ・みこしパレード	北青協夏期スポーツ大会 網青協夏期体育大会
8月	兵庫県青垣町青年来町（3）	盆踊り 札響公演 （実行委参加）	 全道青年大会(陸上競技) 全道青年祭
9月	（2）		
10月	網青協単協訪問　（1）		
11月	青年祭		郷土を考える青年の集い 北青協女子研修会
12月	ふれあい公演　（1）		北国をひらく若者のつどい 北青協冬期青年大会
1月	（2）	さむさむ祭	網青協冬期青年大会 網青協女子会員研修会
2月	単位会訪問		全道青年研究大会
3月	文集『郷土』第18号発行 年度末総会		

※このほか毎月機関紙『あっ勘兵衛』発行

資料）訓青協昭和61年度末総会要項
文集『郷土』第18号

表３　訓子府町北栄地区の農業経営

農家番号	経営耕地	借り入れ	農業労働力	あとつぎ	農外就労	小　麦	ビート	い　も	ま　め	人　参	薬　草	その他	家　畜
1	22.5		㉝32				5.0	1.1		1.4		17.5	34/25
2	22.0	4.0	㊺㊸㊲23			5.0	5.8	6.5	0.9	2.0		1.8	
3	19.8	4.0	㊷33		北糖	8.0	4.5	5.7				1.5	
4	19.3		㊱32									19.3	290
5	18.8	5.3	㊻44	⑳学生		1.7	2.1	＊2.1				9.0	21/15
6	18.0		㊾㊸33			0.8	5.0	12.2					
7	16.6		㊷㊳36			2.5	5.2	7.5				1.4	
8	16.3		㊶	⑲	北糖/病院	6.3	5.0	5.0					
9	15.2		㊷㊽23			5.6	4.5	5.0					
10	15.0		㉞									15.0	22/20
11	14.5		㊹50		北見	4.0	4.0	6.5					
12	14.5	4.5	㊼㊺㊷27			＊2.5	3.2	4.3	0.3			3.0	23/7
13	13.4	5.0	㊻43			＊2.0	2.4	4.5		0.5		4.0	13/9
14	13.0		㊺㊲		北糖	3.0	4.0	6.0					
15	12.0		㊻38	⑲学生	土建	2.0	3.0	4.5			2.5		
16	12.0		㊼42⑲		土建/北糖	4.0	3.0	＊2.0		1.6	0.3	0.2	
17	12.0		65㊷37		土建	1.1	3.2	＊2.2			3.3	0.9	
18	11.5		㊵38			1.4	2.8	4.0	1.9	0.4			
19	11.0		52㉒23		家畜商	2.0	3.0	4.0	1.5				
20	10.0		㉚			2.5	2.5	＊2.5	2.5				
21	9.0		㊱35			＊2.0	2.0	3.0		0.4	0.2	0.1	
22	8.7		㊾㊲27			＊2.0	2.6	2.6			1.5	0.2	
23	8.6		㊽52	後継者他出	家畜商	＊2.2	1.8	4.0	0.5				
24	7.6		㊱35			1.6	2.0	2.7	1.3			0.1	
25	7.5	2.0	㉜31			＊1.7	2.3	2.5					
26	7.0		㊼	後継者他出	土建	1.7	2.0	＊2.0		0.3		0.4	
27	7.0		48	後継者他出	建設	4.9		0.5		0.2		0.5	
28	6.3		㊷				2.3					4.0	35/35
29	6.0		㉝32			1.0	1.8	＊2.0			0.6	0.3	
	※1		※3			※1	※2						※1

注　※1　経営耕地，借入れ地，作付面積の単位はha，家畜は成牛/育成牛の頭数
　　※2　小麦，いものうち＊を付したものはたね小麦，たねいも
　　※3　農業労働力およびあとつぎの数字は年齢，○は男
　　（1987年８月　北大教育学部社会教育ゼミ調査実習より）

表4　経営上の問題と今後の見通しについて

農家番号	経営上の問題	今後の対応	5～6年先の計画
1	拡大したいが土地，コストが高い	借地する	3年先もわからない（農政），拡大，共同化で相対的にコスト下げ
2	普通の生産物ではコスト競争にまける。	安全食品，品質で勝負	契約栽培で有機無農薬農業を
3	農試の分散，基盤整備後の収韻があがってこない。	有機肥料の使用	土地を団地化して25haまでにしたい
4	まずまず。		350～360頭まだもっていきたい，当面300頭
5			
6	借金返済のウェイトが高い。	コストをさげる（肥料），農協青年部，専門部で学習	市場もの作りたいが長く作るとなると難しい
7	土地がもう少しあってもよいが高い。		政策がかわるので計画のたてようがない
8	後継者がやるかやらないか悩んでいる。	自主的にやるようになるまで待つ	
9	規模拡大したいが土地が買えない。	しばらくは拡大はみあわす	10年先は今の倍で
10			
11	借金と収支。後継－自分一人でいい。	収量あげるため栽培管理をきちんと，支出は機械でめんをおさえる	二人でやっている限り変えようがない。後継者は継ぐ可能性ない
12	償還はここ4，5年がピーク。	酪農で地力維持をはかり反収増に	反収あげる。自給肥料，酪農改良の余地あり
13	借金はしたくないが土地拡大できれば	具体的にはあまりない	現状維持，小麦の後作に白菜で収益向上（4年輪作），牛はたい肥とり重点
14	借金，作物の質の向上	農協青年部で勉強，地力維持を	3連作ベースに将来的には拡大
15	規模拡大，しかし土地の問題　品種改良	政策，価格をみながら収支にあった拡大をめざす，農協等の指導	計画はたてるが現状では難しい
16	機械，資材のかいかえ	中古買うか	作目は変わらない，暗きょいれる
17	農産物価格		現状維持
18	償還問題	不必要なお金を出さない（経営，家計）	息子の就農まで大きく変化しない
19	生産資材（肥料，農薬）－見直されてきている	畑作専門部で試験	作るものは変わらない。野菜を少しふやそうか
20	農協の手数料で資材コスト高	品質維持	
21	規模拡大したいが難しい。イチゴの市場拡大	農協と相談，病虫害中心に部会で学習	できれば5ha拡大，施設ふやしたい
22	耕地狭い，ふやせても作るものがない	人の土地をかりてやれば悩まないですむ	負債がなくなれば土地を広げたい
23	地力，酸性強い，暗きょが古くなってきた	土地－鶏糞，金肥，石灰	トラクター追加，規模は現状維持
24	総所得少ない，経費をかかえすぎる	共同化，機械，資材を長くもたす	農政がすぐ変わるので見通しはもちにくい
25	面積少ない，資材高い，土づくり	土壌我析－施肥設計－コスト低減	土地倍に，集約的作物の導入
26			
27	規模小さいのにコスト高い		
28			現状維持
29	拡大したいが厳しい	全体的に生産物価格ダウンの状態が変化しなくては困る	現状維持，野菜を少しずつふやす

（1987年8月　北大教育学部社会教育ゼミ調査実習より）

表5　訓青協会員数の推移

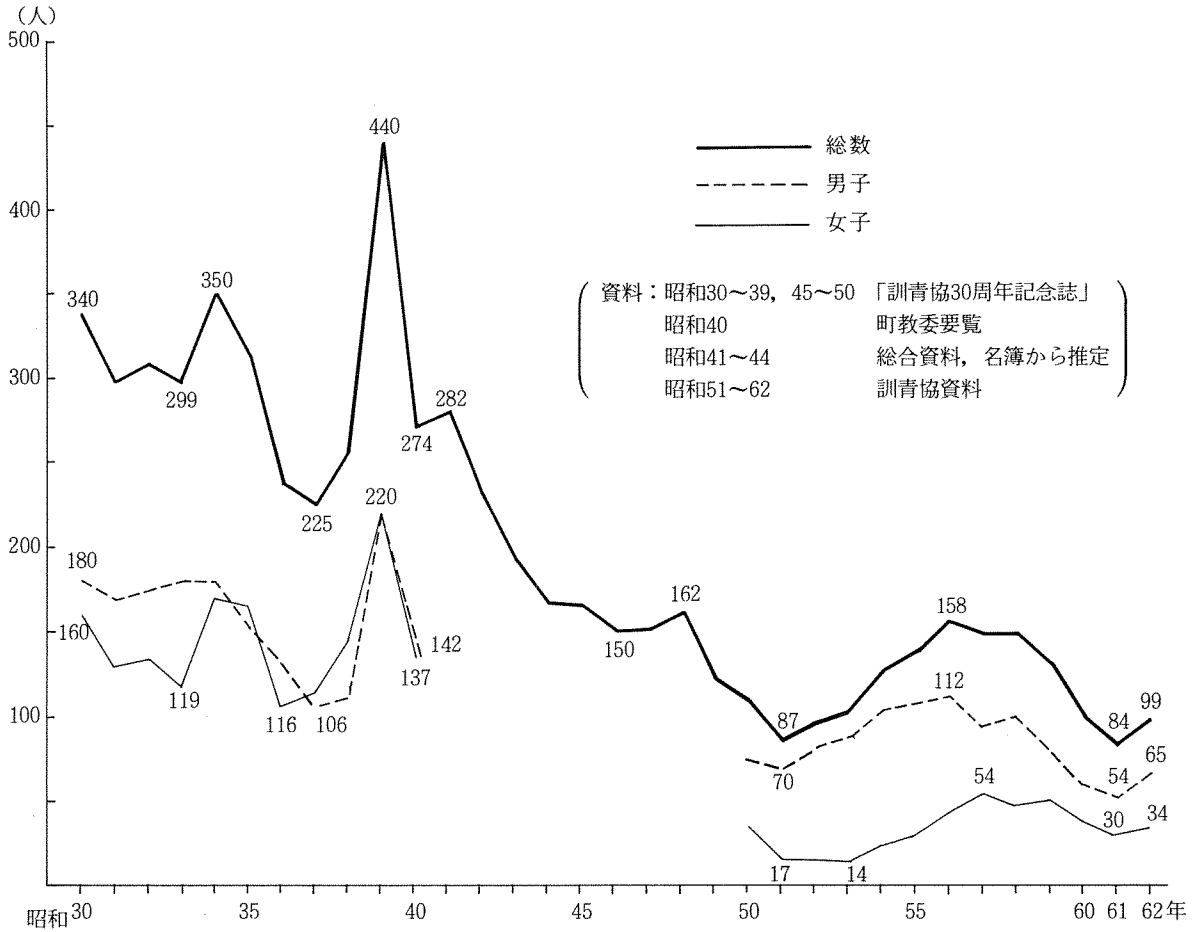

表6　青年団へのアンケートより

（訓青協会員106名のうち36名が回答，回収率34.0％）

○あなたは訓子府のまちづくりについてどのように考えますか。

	農業	非農業	計
a）今の農業をもっと安定した豊かなものにする	7	4	11
b）新しい特産物を開発し，それをのばす	5	5	10
c）農産物加工に力を入りれ，一村一品運動をする	5	4	9
d）地元の2次，3次産業をのばす	2	0	2
e）大企業を誘致する	2	0	0
f）わからない	2	1	3
g）その他	0	3	3
無回答	2	1	3

その他の回答－教育施設の充実・心豊かにくらす町づくり・他の住民がすみたくなるようなまち

○訓子府のまちの発展のために青年はどのようなことをしたらよいと思いますか。

	農業	非農業	計
a）農業経営の改善や新しい技術の導入を率先して行う	2	0	2
b）農業青年と商工青年が協力して地場産業おこしをする	4	3	7
c）お祭り，イベントなどで町のムードを盛りあげる	8	7	15
d）奉仕活動などで町の多くの人と交流をもつ	3	4	7
e）わからない	3	1	4
f）その他	1	4	5
無回答	2	0	2

その他の回答－自己認識・学習と研究，青年団を出ても地域のリーダーとなる様馬力をだす・何事にも力を出しきって取組んでみること・訓子府の様々な青年が共に語り学びあう中から町づくりを考え実践していきたい